佛立開導日扇聖人物語 第10回

200th Anniversary
佛立開導日扇聖人ご生誕200年慶讃

安政四年（一八五七）一月十二日、開導聖人は四十一歳の時、『本門佛立講』をご開講。それ以降、次第に京都の町を中心に御題目のご信者が増えていったんだ。ご開講から一年半後には、何と京都から滋賀県大津、そして大阪方面にと弘まっていったんだね。今回は滋賀県の大津地方に御題目が弘まった様子のお話しをするね。

大津佛立講

安政五年（一八五八）八月。近江国（滋賀県）の大津追分という所で酒造業（お酒造り）の商売をしていた小野山勘兵衛さんは、長い間、ひどい胃病で苦しんでいたんだ。何とかこの病を治そうと、いろいろな信心にすがったんだけど全く効果がなかったんだ。そこで勘兵衛さんは生きる希望を失い、病の苦しみから逃れたい一心で、自らの命を絶とうとしたんだ。

その様子を、たまたま勘兵衛さんの庭で仕事中だった植木職人の高橋儀三郎さんが見つけたんだ。佛立講（宗）のご信者であった儀三郎さんは、勘兵衛さんの自殺を思い止まらせ、すぐに京都の開導聖人のもとにこのことをお知らせしたんだ。

大津追分・法華堂に開導聖人ご自身の護持の御本尊と御尊像等をご遷座（移動）される様子
「清風一代記略図」・御自画伝・扇全５巻205頁

その日の晩、開導聖人のご指示を受けた数人のご信者が、京都より勘兵衛さんの家にやって来たんだ。そして、病人の勘兵衛さんの周りに、その家族や親類の人々を集め、御題目の御本尊をおまつりし、みんなで「南無妙法蓮華経」と御題目をお唱えし始めたんだ。

御題目口唱（御題目を繰り返しお唱えすること）は一晩中行われ、明け方、何をしても治らなかったお腹の痛みが治ってしまったんだ。これまで何も食べられなかった勘兵衛さんが、「お腹が空いた！」と大きな声で言い出すんだ。本当に驚きだね。

とても喜んだ勘兵衛さんやその家族は、すぐに佛立講に入信（ご信者になる）したんだ。この話は、大津追分の町の評判となり、勘兵衛さんの親戚で米問屋を営む御牧卯兵衛さんをはじめ、周りの多くの人々が佛立講に入信したんだよ。

病人の勘兵衛さんの周りをご信者、家族、親類が囲み一晩中熱烈な御題目が唱えられた

すっかり元気になった勘兵衛さんは、早速、京都の開導聖人のもとを訪れてお礼を申し上げ、大津の地にも「佛立講」をひらいて欲しいとお願いされたんだ。

大津佛立寺の境内に残る開導聖人の住居の「今大路屋敷」

安政六年（一八五九）、開導聖人のお許しをいただき勘兵衛さんを講元（中心となって世話をする役）に、勘兵衛さんの家で御講が奉修されたんだ。ここに「大津佛立講」が開講されたんだよ。この大津佛立講は、勘兵衛さんと親戚の御牧卯兵衛さんの熱心なご奉公でとても発展するんだ。

大津法華堂

大津地方にたくさんのご信者が増えていった頃、御牧卯兵衛さんが茶畑をご有志されたんだ。この土地に法華堂（現・佛立寺）を建てることになったんだ。

文久二年（一八六二）四月、法華堂が無事に完成。開導聖人は京都よりご自身の護持（大切にまもり保つこと）される御本尊と御尊像等をご遷座（神仏を他の場所に移すこと）し、これが佛立宗の「最初道場」つまりお寺の第一号となるんだよ。

大津佛立寺　文久２年（1862）４月、大津追分の地に本門佛立講最初の道場が開導聖人のご創建によって建立された